

地震で崩れ落ちた湖中の城

滋賀県立大学教授 中井 均

寛文2(1662)年、近江高島を震源とするマグニチュード7.6の大地震が発生し、琵琶湖に築かれた膳所城^{ぜぜじょう}では天守が北西に大きく傾き、本丸の三重櫓は土台もろとも湖中に崩れ落ちるなど甚大な被害を受けました。滋賀県立図書館にはこのときの被害の状況と、修復計画を示した絵図が残されています。この絵図によると地震で崩れる以前の膳所城は人工島として築かれた本丸と二の丸が琵琶湖中に浮かんでいました。まさに琵琶湖の浮城といった形状です。ところが地震後に再建された膳所城ではこの本丸と二の丸をひとつにした構造で、浮城には違いのないのですが、島のように浮かぶ形状ではなく、琵琶湖に突出した半島状の形状になってしまいました。天守の位置も築城当初は本丸の北西隅部に突出していたものが、本丸と二の丸間の堀が埋め立てられてしまったことにより、本丸北辺墨線の中央に位置することとなりました。

さて、この膳所城は慶長5(1600)年の関ヶ原合戦後に徳川家康が最初に築いた城ということはあまり知られていません。関ヶ原合戦に勝利した徳川家康は、翌日には大津城に入城し、その修築を急務としました。しかし、家康の側近本多正信は大津城が長等山からの砲撃によって開城したことより、大津の地での再建に反対し、新城の築城を膳所にすべきと進言しました。『家忠日記』には「天下普く治め給ふ後、城を築かしむるの始也^{あまね}」と記されています。

こうして慶長6(1601)年6月に膳所での築城が決定すると、その工事に家康は8人の奉行を派遣し、諸国の大名を手伝い役として動員した、天下普請としておこなわれました。また、その縄張りには藤堂高虎^{なわば}があたりました。こうした築城からいかに大津の地が徳川方にとって重要視されていたかを窺うこと^{うかが}



ができます。関ヶ原合戦後、大坂を睨む最前線として膳所城が築かれたわけですが、当時の記録ではこの築城に際して大津城の城門や石材が持ち運ばれたとあり、大坂城攻めを想定する家康にとって膳所築城がいかに急務であったかを物語っています。

そして早くも同年中には城主となった戸田一西^{かずあき}が膳所城に入城します。実は一西は関ヶ原合戦直後に家康によって大津城主に任じられていますが、それも大津が王城で枢要の地であり、武勇にすぐれ、且つ天性誠実な人柄が買われてのことでした。大津という要衝に琵琶湖に浮かぶ新城が築かれたのですが、そこには家康が最も頼りにしていた一西が城主として入れ置かれたのでした。

ところで4月の熊本大地震により熊本城の石垣が大きく崩れました。加藤清正によって築かれた熊本城の石垣が地震で崩れたことに大きな衝撃が走りましたが、石垣は決して地震対策で築かれたものではありません。実際、日本の城の石垣は江戸300年の間に地震で崩れると修理し、また崩れると修理の繰り返しでした。膳所城も同様で、絵図が多く残されているのですが、これらの絵図は地震で崩れた石垣の修理願のために描かれたものです。特に寛文2年の大地震では城の縄張りそのものを改修しなければならなかったのです。

中井 均(なかい ひとし)

1955年大阪府生まれ。龍谷大学文学部史学科卒業。(財)滋賀県文化財保護協会、米原市教育委員会、長浜城歴史博物館館長を経て現職。びわこ学院大学、金沢大学非常勤講師。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長。専門は日本考古学。特に中・近世城郭の研究。